

豊明希望チャペル礼拝

2025/10/19

『わたしはあなたを喜ぶ』

ルカの福音書 3 : 21～38



本日の、大部分はイエス様の家系図であります。
イエス様のお父さんが誰で、そのお父さんが誰で・・・皆さんは、どのくらいまで先祖をさかのぼることが出来ますか？私は、母が召されたとき、父の生まれた村に行って、父の先祖の戸籍をコピーしてきました。江戸の終わりまでたどることが出来ました。父が、うちは武田(武田信玄)の家系の流れだと聞いたことがありました。それで、その武田のう

ちが先祖伝来のものを処分すると言う事になって、刀と槍を買い受けてきたと聞いたことがありまして、今も私が引き継いでいるわけですが、半信半疑ではありましたが、果たして、その

戸籍に基づいて系図をたどると、「武田」という姓がたくさんみられて、そこからの別れ？であるということが、たしかにわかりました。

ちなみに、母方は岐阜のルーツで、母方の父親の苗字は、長尾(長尾景虎：上杉謙信)で、川中島の戦い(1542 年、武田が長野県の南部中部を支配し、北を支配する上杉軍と川中島で戦った決戦。勝者は?)じゃないか・・・それで、時々、父と母は喧嘩していたのか・・・とか、おもしろく想像しているのです。

どうでもいい話でしたが、聖書の中で、もっとも面白くなくて、飛ばす箇所といわれる、家系図が書かれたところです。旧約聖書でもたびたび、この系図は出てまいります。たしかに聖書は、系図を大切にします。なぜなら、私たちが生まれることは、偶然ではなく、神の御心があって、父があり母がある(たといそれがクリスチャンでなくても・・・)と聖書は考えるからです。うちの父はね・・・未信者で、あまり尊敬していなくても・・・と言ってみても、そこには、神の計画がある、神の御心があって、あなたのその父であり、母であるということなのです。私の家系を少し紹介しましたが、父のその家系の中に、福澤という、飯田市で牧師をされた先祖がいるということ、そして、その福澤牧師(日本基督教団飯田入舟教会)が、以前、私に言ったところでは、(自)の親族から、クリスチャンが出るように、牧師

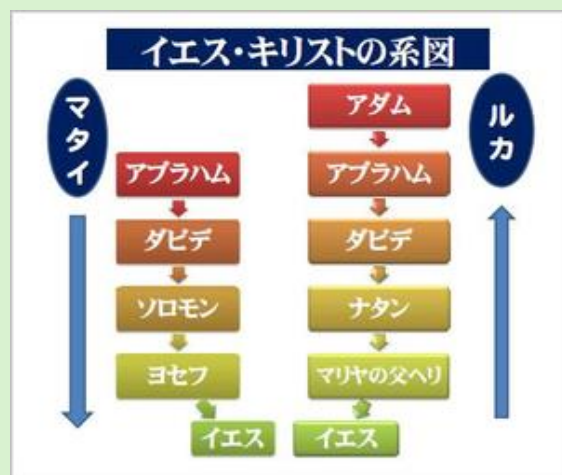
が出るようにと、いつも祈っていたというのです。皆さんの生い立ちのなかにも、神さまの介入がかならずある、そのことを知る事は、生まれる前から、神の御心があつたと、ダビデが言うように、私（私たち）が、神によって、生まれる前から知られ、神の御心の中でだけ、私たちが生を受けるのだということ、私に対する神の御心、思いを理解を黙想する上で、大事だと思います。私は、たくさんのクリスチャンが、クリスチャンになって気づいたけれど、私の親戚にクリスチャンがいました、祈られていましたと、語られる方が多いのです。さて、新約聖書にも、系図があります。マタイの福音書の 1 章が有名であります。このマタイ 1 章、いきなり系図から始まりますから、評判が悪いのでありますが、ルカの福音書でもあるんですね。今日の箇所ですが、21 節からとしましたが、21, 22 節で、イエス様の洗礼の場面(前回のバプテスマのヨハネの続き)が、あつて、23 節以下は、その系図となっております。

洗礼の場面を最後に教えられるとして、先に、系図のほうを見ておきましょう。美味しい物を後にして、まずいものを先にするということではありません。むしろ、量からいったら、この系図のほうが多いのでありまして、ルカは、この系図を、なくとも、この書の宛先である、テオピロに見せたい、また、私たちに見せたいと思っているようですから、何をルカは伝えたいのか、私たちは知るべきなのかと言うことを、見ておきたいと思います。

ルカのイエス様の系図を見ると、マタイのイエス様の系図を参考にするべきだと思います。というのは、ルカの系図には、マタイと差別化というのか、マタイの系図を意識しているのではないかと思われる特徴があるからです。今日の、この箇所をまず、見ます。

「3:23 イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で、ヨセフの子と考えられていた。ヨセフはエリの子で、さかのぼると、」

30 歳まで、イエス様は、家族に仕えられた、そのごとく、イエス様は、私たちの歩みに、へりくだって、歩み寄り、仕えてくださるということ、それもルカの強調点だと言うことは、前に教えられた通りです。



注目したいのは、「**ヨセフはエリの子で**」という部分です。マタイの福音書 1 章を引用します。

マタイの福音書「1:15 エリウデがエレアザルを生み、エレアザルがマタンを生み、マタンがヤコブを生み、1:16 **ヤコブがマリアの夫ヨセフを生んだ**。キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった。」

ルカは、マリアの夫ヨセフは、エリの子だと言い、マタイの福音書では、ヤコブが、マリアの夫ヨセフを生んだとあり

ます。生んだという場合、男も家系として語られるときは生んだというのですが、ヤコブが、ヨセフの父親だと言うのです。

また、31 節をみると、ダビデの子が、一方のマタイは、ソロモンからの家系であり、ルカは、ダビデの子ナタンからの家系で、そこからは、もちろん、すべてルカとマタイでは違っています。

マタイ「1:6・・・ダビデがウリヤの妻によって**ソロモン**を生み、」

ルカ「3:23・・・ヨセフはエリの子で、さかのぼると、3:24 マタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、・・・:31 **ナタン**、ダビデ、」

他にも色々、比較したい部分はあるのですが、ここまでにしておきましょう。

この違いの理由は、正確にはなぞなのですが、少なくとも、ルカは、マタイの、あの系図を知りながら、あえて違う系図を、発見したか、あるいは、意図的に、私たちに見せようとしているということです。

一番、私が重要なことだと思うのは、新発見の系図でさかのぼっても、結局は、ダビデに至ると言うこと、どんなにあがいても、ダビデに至る、その意味は、聖書の預言通り、神の計画通りだということを言いたいということであります。

神さまがダビデに言われた言葉にこのようなものがあります。

Ⅱサムエル書「7:12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、**あなたの身から出る世継ぎの子**をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは**彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。**」

これ以来、この言葉は、救い主が、メシヤが、ダビデの子孫であると、理解してきました。ですから、パウロも言います。

Ⅱテモテ 2:8「**ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリスト**を、いつも思っているさい。」

歴史的に、ルカのこの系図が何であるのかが考えられてきましたが、マリアの系図は、女性のゆえにさかのぼることが出来ませんが、マリアの系図ではないかということです。イエス様は、家系的には、ヨセフですが、処女マリアから生まれたのですから、ルカは、ヨセフの系図をさかのぼるのは変だと思ったかも知れません。医者で科学者で、歴史家とも言われる彼らしい考えがあったかもしれません。それで、彼は、マリア側の系図をたどったのかもしれませんが。そしたら、やっぱり、ダビにつながった、その時の、彼の歓喜！・・・それは、私が、あ、武田姓にたどりついて、父は嘘つきではなかった・・・と気づいたときの歓喜ではないですが、それでもたどりついたぞ！聖書は、どう疑い、どうほじくり返しても、やっぱり確かだ、神の御言葉は、確かなのだと理解した喜びがこの系図には現れているのかもしれない。

そして、もうひとつ重要なのは、マタイが、ユダヤ人の系図の慣習にしたがって、アブラハムまでしか、さかのぼらないのに、ルカは、人類の始祖、アダムにまでさかのぼっているという点です。そこにある強調点、メッセージは、マタイが、正しき、ユダヤ人のルーツとしての証明をしたとすれば、ルカは、シリヤ生まれと

され、また、異邦人の官僚、あるいは、異邦人を念頭に書いた書として、キリストは、ユダヤ人の子孫と言うだけでなく、人類の子孫であって、異邦人である私たちとも関係があると言うことを言っているのは明白だと思います。

異邦人よ聞け。日本人よ聞け。キリスト教は西欧の宗教だとか、ユダヤの宗教だとか言うなかれ、私たち人間の唯一の希望、救いは、この方にある、イエス・キリストこそ、アダム以来の、すべての人間の救いなのだとということです。

それで、最後に、最初の箇所に戻ります。今一度、ルカの福音書 3:21~22 を読みます。バプテスマのヨハネが、イエス様にいよいよ出会った場面です。

「3:21 さて、民がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマを受けられた。そして祈っておられると、天が開け、3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」」



伝統的に、こんな聖画で見る場面ですね。特に、ルカが注目して書いているところは、これは、他の福音書でも触れられている言葉ですが、やはり、天からの声。神の声？であります。

「:22 ・ ・ と、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」」です。

この場面ですが、まず、民がみなバプテスマを受けていたという場面が、再び、語られます。前回のところでは、民衆、収税人、兵士らが来ていたことが書いてありました。おそらく、列をなして、バプテスマのヨハネから、洗礼を受けていたであろう場面です。他の福音書では、ヨハネがイエス様を見るなり、ひれ伏して、あなたこそ、メシヤですね、キリストですね、私があなたから洗礼を受けなければならない立場ですと、あわてて、洗礼を拒否するのですが、そういう感じがありません。一応確認しましょう。

マタイの福音書「**3:13 そのころ、イエスはガリラヤからヨルダン川のヨハネのもとに来られた。彼からバプテスマを受けるためであった。3:14 しかし、ヨハネはそうさせまいとして言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたが私のところにおいでになったのですか。」**」

ルカの書き方の強調点は、神に直接言われて、ヨハネは理解したということです。ああ、がたいのいい（大工ですから・ ・）、陽に焼けた、そんな男を、誰だか

分らないうちに洗礼を授けていると、突然、天から声がしてきた。「わたしの愛する子」！神の声？しかも、私の子だと？神の子だと？という驚きです。

また、この天からのいきなりの声は、実に唐突です。脈略がない。そして、人に聞かせることば、ヨハネよ、これこそが、あなたが預言すべきイエス・キリストですよというような言い方、人に聞かせる言い方と言うより、まるで、これが、私の子だよ、私の愛する子だよという一人称の、プライベートな、個人的な呼びかけだと言うことです。神さまは、我が子が地上にいることを認めて、あらためて、ああ、我が子よ、愛する我が子よ、あなたは、我が子です！という自慢のような、久しぶりに見た我が子に会えた親の喜びのような声だと言うことです。

神は、御ひとり子を、地上に遣わした。罪の世界に生まれさせた。遠いところに行ってしまった。さみしい、我が子のこと。久しぶりに、地上に生き、天での姿とずいぶん変わってしまった、黒くて、節々の太い、そんな神らしくなくなってしまった、我が子、しかし、確かに、私の愛する子です！と。あえて、罪人の列にならんで、人の罪の身代わりとして、十字架につくために、罪人の一人に数えられた、罪人の贖うため、信じる者を神の子として天国に迎えるために行った、愛する我が子。そういう意味であります。さて、この印象的な聖句を今一度確認して終わります。

「3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」」

私たちは、神様に愛され、イエス様に愛されています。神がイエス様を愛したように、私たち罪人を愛され、イエス・キリストも私たちを愛されて十字架につかれた。この神様の強い私たちに対する愛、思いを、私たちは身に受けているのです。この神の愛からはじめ、ここから成長する、今週の歩みとさせて頂きたい。心から願います。